

張（野口）赫宙の日本語文学における弱者：中間者 たちの軌跡

張，允麿

<https://doi.org/10.15017/1670410>

出版情報：九州大学，2016，博士（比較社会文化），論文博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏名	張 允 麿			
論文名	張（野口）赫宙の日本語文学における弱者—中間者たちの軌跡—			
論文調査委員	主査	九州大学	准教授	波瀨 剛
	副査	九州大学	教授	松本 常彦
	副査	九州大学	准教授	西野 常夫
	副査	久留米大学	教授	浦田 義和
	副査	九州産業大学	教授	白川 豊

論文審査の結果の要旨

本論文は張赫宙文学における弱者、特に二つの領域の間で揺れ動く中間者の存在に注目することによって、彼の創作活動に関する新たな解釈の地平を開拓しようとするものである。

張赫宙文学は総じて「親日か、反日か」、あるいは、「民族的か、反民族的か」という二者択一式の枠組みで語られることが多く、作品の中で描かれる多様な世界観や人物像に注目が集まることは少なかった。本論ではそうした人物像のなかでも、とくに「弱者」に光を当てて論じる。張の文学にあられる「弱者」の特徴は、支配者/被支配者の関係において生成される弱者ではなく、支配者はもちろん通常の被支配者の属性からも逸脱してしまうような存在、所属する場を持ち得ず絶えず不安定な状況に置かれる「中間者」として存在する点にある。

論文の構成は、序章の後、本論部分が二部六章から成り、参考として資料編を付している。序章は本論文の目的と方法を提示している。第一部「土地を追われる人々」では、戦争と国策によって生活の場を奪われた人々の物語を中心に考察し、第二部「引き裂かれる主体」では、身体的・精神的な喪失を経験する人々の物語について検討している。各章の概要は以下の通りである。

第一章では長編小説『開墾』（一九四三年）を対象とし、朝鮮人農民が満洲へ開拓地を求めて移住を試みるものの、開拓地の現地住民との葛藤に巻き込まれていく過程を分析した。そのなかで、日本からの庇護も、現地の中国人との妥協も拒む朝鮮人が登場している点に注目し、国策協力期の文学においても、後に見られる「中間者」的存在を描いていた可能性について指摘した。

第二章は朝鮮戦争を題材にしている長編小説『嗚呼朝鮮』（一九五二年）を対象にして、登場人物聖一をキリスト教徒に設定し、母を求めて聖地巡礼のように教会をめぐる姿について分析を行った。それによって、北か南かというイデオロギーの対立からは見えてこない人々の存在に注目する作家の視点を浮かび上がらせることが可能となった。

第三章では、満洲に移住していた日本人の開拓者たちが、戦後引揚げてから、故郷にも帰れず、日本各地の開拓地を転々と移り住む光景が描かれている小説「第二の鋤」（一九五八年）を分析した。開拓地として鋤を下ろした富士の梨ヶ原が米軍射撃練習場としてアメリカに接收され、引揚げのときに体験した脅威をふたたび感じざるを得ない人々の姿は、第一章、第二章の問題提起とも関連する作品として分析できることが指摘されている。

第四章では、初期の小説「深淵の人」（一九三六年）を分析し、家庭から疎外されることで「狂気」に至る登場人物の文守用と、文守用の殺人容疑を弁護する人物の曹勲に注目することで、傍観者である曹勲が救いようのない文の姿に感情移入した結果、自らの心の「深淵」を覗いてしまう点を指摘した。

第五章では『秘苑の花』（一九五〇年）を扱い、元李王の李垠と日本の皇族梨本宮方子との結婚を題材にしたこの小説が、国家と国家ではなく、個人と個人との結婚として二人の姿を描きつつ、李垠が戦前、戦後を通じて祖国から疎外されている姿をとらえている点を検証した。一方の方子も日本王室から疎外されているように描かれることで、二人の結婚が持つ意味と生きざまが、政略結婚の失敗を意味している小説であると結論づけた。

第六章では、「脅迫」（一九五三年）と「異俗の夫」（一九五八年）の二編の小説を比較しながら、張赫宙の実人生とも重なるような登場人物の「私」が、たんに自己弁護を行う装置として存在してい

るのではなく、張の創作活動を通して描かれる「中間者」の一典型として創造されている点を指摘した。

また、いまだに戦後の創作活動については網羅的な調査が行われていない現状に鑑みて、資料編においては、論者の調査を元に作成した作品年譜と、雑誌『小説公園』の総目次を掲載した。さらに、今後の研究の進展を見据えて、新資料に関する内容の紹介と、張赫宙と白川豊氏との間で交わされた書簡を掲載した。

このようにして、研究の基礎となる創作活動の実証的な調査を前提として、張赫宙、野口実、野口赫宙と三つの名前を持つ一人の作家がたどったアイデンティティの変遷に注目する先行研究の蓄積を踏まえたうえで、戦前の初期から戦後の作品群へと引き継がれている弱者の姿をたどった。

一九九〇年代に至るまで決して活発だとはいえない状況にあった張赫宙研究において、近年では非常に多くの論考が公表されている。論者はそのような最新の動向も網羅的に押さえたうえで、「中間者」という新たな視座をもたらそうと試み、従来の二項対立的な枠組みを刷新することにある程度成功したといえる。これにより、戦前の評価はもちろん、戦後の創作活動を再評価する契機となり得る重要な知見をもたらす効果が期待できる。主要概念の再検討や、細部の解釈は課題として残っているが、博士（比較社会文化）の学位を授与するのに十分値する内容となっている。